

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02696

研究課題名(和文)日・中・韓三カ国協働による「異己」理解共生を旨とした国際理解教育のプログラム開発

研究課題名(英文) Program development of international understanding education aiming at coexistence with understanding of "IKO" through collaboration between Japan, China and Korea

研究代表者

釜田 聡 (KAMADA, SATOSHI)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：60345543

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：(1)特定のグループ・クラス内の少数派を意図的に顕在化することができ、その後の意見交流、特に価値葛藤と対話を促すことにつながった。(2)「異己」を通じて、自己と「異己」との対話、あるいは「異己」を通じて、国境を越えた対話を促すことができた。(3)「異己」との対話を深めることで、自分と異なる価値判断基準をもつ集団の存在に気づき、理解と共生のプロセスを考えようとすることを促すことができた。(4)日中韓の教室を磁場として、三カ国協働による国際理解教育の理論と実践の往還が実現した。(5)日中韓三カ国の研究者・実践者が誠心誠意の交流ができ、しなやかで強靱な人と人とのネットワークが構築できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)「異己」概念を活用した日中韓相互理解を旨としたカリキュラム開発と授業実践を行ったことである。価値多元化社会においては、「異己」理解と「異己」との共生を目指すことは喫緊の課題であった。本研究成果の社会的意義は極めて高く、関連する学術分野に新たな知見と示唆を与えた。(2)日中韓の研究者と教育実践者との協働研究であったことである。本研究は日中韓の研究者と教育実践者が協働で研究に取り組み、日中韓の子どもたちの対話を試みた。対話から導出した知見をもとに、新たなプログラムを開発・改善した。こうした協働研究を通じて、教育研究の人的ネットワークを、よりしなやかで強靱なものに再構築することができた。

研究成果の概要(英文)：(1) This study deliberately revealed minorities within groups and classes. I was able to encourage subsequent exchanges of opinions, especially value conflicts and dialogue. (2) This study promoted dialogue between oneself and "foreigners" and cross-border dialogue. (3) This study encouraged children and students to have a dialogue between themselves and "foreigners", to clarify the existence of groups with different value judgment criteria from themselves, and to think about the process of understanding and symbiosis. (4) This study linked classrooms in Japan, China and South Korea, and promoted exchange of theory and practice of international understanding education through collaboration between the three countries. (5) This study is an educational researcher and education in the three countries of Japan, China and South Korea. Practitioners promoted sincere exchanges and built supple and strong people-to-people networks.

研究分野：国際理解教育

キーワード：日中韓 異己 理解 共生 国際理解教育 プログラム開発

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 価値多元化社会の到来と東アジア情勢

価値多元化社会の到来に伴い、学校教育の場においては、多様な価値観と個性が衝突し、様々な教育上の諸課題が生じている。そこでは、外国につながるのある児童・生徒の存在や特別な教育的支援が必要な児童・生徒の増加、個性豊かな児童・生徒の思いや願いを尊重しつつ、集団としての調和を図ることが喫緊の課題となっている。

(2) 東アジア情勢

日本と中国・韓国は、これまで歴史認識等（教科書叙述や島の領有権等）の問題で、度々、政治外交上の問題が顕在化し、教育の場や市民レベルの交流にも大きな影を落とすことがあった。このような日中韓の関係の中、三カ国の相互理解や和解を図るための共同研究や教育実践交流、学術的な教育研究交流が着実に蓄積されてきた。しかし、これらの研究成果の多くは、国家間の葛藤をどのように乗り越え、相互理解を図るべきかという教育研究が中心であった。

教育交流では、共同研究や修学旅行、スタディツアー等で、日中韓の人的交流が進み、人と人とのネットワークが構築されてきた。一方で、日常の教育活動で、日本と中国、韓国の児童・生徒の価値観や個性にふれたり、対話をしたりする場を設定した教育実践研究は少ない。

(3) 先行研究

本研究課題に関連する先行研究として、2009-2011 年度科研費基盤研究(B)研究代表者大津和子「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」(以下、三カ国科研)がある。これは、研究代表者の釜田や研究分担者の森茂他が所属する日本国際理解教育学会の会員が中心となって、日韓中の研究者・実践者が共同で取り組んだ研究であり、国際理解教育の理論を背景にして紡ぎ出されたカリキュラム・教材集である。この研究成果は、さらに集約・整理され、2014 年に大津和子編『日韓中で作る国際理解教育』(明石書店)として、研究成果が公刊された。また、姜英敏は、伊藤哲司・山本登志哉編『日韓傷ついた関係の修復』(2011 年、北大路書房)や山本登志哉編『ディスコミュニケーションの心理学』(2011 年、東京大学出版会)他の中で、「日中の小学校おかしめをめぐる対話授業」(2007-2008)や「かつあげをめぐる対話授業(早稲田大学と北京師範大学の学生)」(2008)の大学生同士の対話授業の成果を公表している。これらの先行研究は、児童・生徒、学生が諸事象を「理解」することについては顕著な研究成果が確認できる。一方で、児童・生徒、学生が異なる価値観を理解することにとどまり、異なる価値観をもつ他者との「共生」へのアプローチについては課題があった。価値観の対立、いわばお互いの「異己」性こそが、文化間、集団内外の葛藤や対立を生み出す要因であることを考えると、「異己」を組み込み、共生へのアプローチを射程に入れた教育実践の集積が待たれている。このような先行研究を踏まえ、現在は、日中共同「異己」理解共生授業プロジェクト(以下、「異己」プロジェクト)を立ち上げ、本研究課題の基礎的な準備を進めているところである。

以上のことから、これまでの重厚な研究成果を踏まえた上で、「異己」の概念を用いることは、価値多元化社会における相互理解と共生を促す国際理解教育のプログラムを開発するために極めて有効な手立てになると考え、本研究課題を「日・中・韓三カ国協働による「異己」理解共生を旨とした国際理解教育のプログラム開発」と設定した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本・中国・韓国の研究者・教育実践者が、価値多元化社会における相互理解と共生を促すための国際理解教育のプログラムを「異己(いこ)」の概念を用い、理論的・実践的に検討し、開発・改善することである。

「異己」は価値多元化社会において、異なる価値観や立場をもつ相手を意味する。主に中国で使われている概念である。本研究では「異己」を同じ集団にいて、お互い避けられない場合に限定する。集団の範囲は、問題設定により、伸縮自在なものとする。研究対象は、小中高校生と大学生である。研究成果として、教育の場で広く活用できるよう、読み物資料(シナリオ)やビデオ教材、マンガ教材などを予定している。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、次の手順で研究を進める。

- (1) 先行研究(理論と実践)と「異己」理解・共生プロジェクトの研究成果の分類・整理する。
- (2) 日本・中国・韓国における最近の価値多元化社会特有の教育上の諸課題を分類・整理する。
- (3) (1)と(2)の研究成果を踏まえ、本研究で対象とする資質・能力を設定し、国際理解教育のプログラム開発の視点を導出する。
- (4) (3)の研究を踏まえ、国際理解教育のプログラムを開発し、実践を通じて、修正する。
- (5) (4)までの研究成果を踏まえ、国際理解教育のプログラム開発し公表する。

本研究では研究期間を平成 29 年度からの平成 31 年度までの 3 年とする。

平成 29 年度(初年度)は基礎研究期間として、先行研究(理論と実践)と「異己」理解・共生プロジェクトの研究成果の分類・整理、考察を行い、日中韓での教育実践を通じて、国際理解教育のプログラム開発の視点を導出、整理する。

平成 30 年度(2 年目)は、プログラムの開発期・実践期として、日中韓の各教室で国際理解

教育のプログラムを実践し、それぞれの国、各教室で、授業実践を通じての交流・対話を促進する。それぞれの国の各教室での実践を通じて、国際理解教育のプログラムを修正する。

平成31年度（最終年度）は、研究のまとめ・研究成果物の公表の時期とする。また当初の研究計画どおりに進まない場合に適宜対応できるように、基本的な調査や考察等は初年度と2年目に集中させ、最終年度では研究のまとめと成果物の公表に専念できるように研究計画全体を調整するとともに、研究計画全体にゆとりをもたせる。

4. 研究成果

(1) 研究成果の概要

日韓中の教室を磁場として、三カ国協働による国際理解教育の理論と実践の往還が実現した。また、日韓中三カ国の研究者・実践者が、誠心誠意の交流ができ、しなやかで強靱な人と人とのネットワークが構築できた。研究内容にかかわっては、次の三点を研究成果としてあげることができる。

- ・「異己」概念を活用したことで、特定のグループ・クラス内の少数派を意図的に顕在化することができ、その後の意見交流、特に価値葛藤と対話を促すことにつながった。
- ・「異己」を通じて、自己と「異己」との対話、あるいは「異己」を通じて、国境を越えた対話を促すことができた。
- ・「異己」との対話を深めることで、自分と異なる価値判断基準をもつ集団の存在に気づき、理解と共生のプロセスを考えようとすることを促すことができた。

以下、具体的に説明する。

(2) 3年間の取組み

毎年、日本と韓国、中国で授業研究と研究会議を行い、児童・生徒の対話の実際と授業実践者の声を丁寧に読み解くことを重視して、「異己」プロジェクトを進めてきた。具体的な授業場面では、「チョコレート」をめぐる友人間の所有の問題について、グループ・クラス、国境を越えての対話が行われた。意図的に「異己」を浮き彫りにする手法を使うことによって、クラス内の「異己」、国境を越えた「異己」、自分と「異己」について考えを深めている児童・生徒の姿を見出すことができた。これらの実践研究の成果は、各種研究報告書等に公表されている。

これまでの「異己」プロジェクトの授業実践研究の成果から、次の授業プロセスが構築され、教材「チョコレート」が開発された。以下、説明する。

「異己」プロジェクトの授業プロセス

最初に、同じ集団内に、自らと価値判断と異なる他者・グループの存在を認識する。次に、同じ集団内での対話を通じて、「異己」の存在をより浮き彫りにする。（例：友人関係・友人間の所有物の概念が日本と中国、あるいは韓国と著しく異なる事例について、個人・グループで考え、さらにクラスで話し合う。）続いて、国境を越えた仲間と意見交換を行う。対話の結果から学ぶ場を設定する。最後に、相互に意見交換を行い、さらには共生へのアプローチを体験する場を設定する。

教材：「チョコレート」（中学生用）

中学生用

みんなで修学旅行に行きました。ホテルに泊まった夜のことで、つよしさん（みかさん）は、仲の良い友達のたけしさん（あきこさん）と2人で同じ部屋に泊まることになっていました。おやつを食べてもよい時間になりました。つよしさん（みかさん）は、たけしさん（あきこさん）と一緒に食べようと思って持って来たチョコレートを出しました。たけしさん（あきこさん）にそのことを伝えようと思いましたが、伝える前にトイレに行きたくなり、そのチョコレートをテーブルの上に出したまま、トイレに行きました。しばらくして、戻ってきたら、出しておいたはずのチョコレートが全部なくなっていました。つよしさん（みかさん）は、たけしさん（あきこさん）に「ぼく（わたし）のチョコレート知らない？」と聞いてみました。するとたけしさん（あきこさん）が「ぼく（わたし）もチョコレートが大好きだったから、食べちゃったよ。」と言いました。

たけしさん（あきこさん）の行動について、あなたはどのように思いますか？

設問

- A ぜんぜん気にしない。仲良しなので、お互いのものを区別する必要はない。
- B 少し違和感はあるが、問題にしない。二人の関係にも影響はない。
- C あまりいい気持ちではない。今度またこのようなことがあったら困る。
- D 不愉快だ。行動は理解できない。

「異己」プロジェクト授業構造

0 事前のアンケート調査の実施 教材「チョコレート」

1 「異己」の存在を認識する

集団内に判断基準が相反するグループ（多数派と少数派）があることを認識し、多数派・少数派（「異己」）で対話をする場を設定する。

2 「異己」の交流

国境を越えた集団間の交流によって、価値判断基準が逆転する場合があることを認識し（グ

ラフ等)、相互に判断基準とその理由等について対話をする場を設定する。

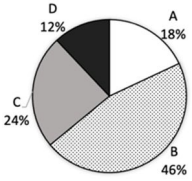
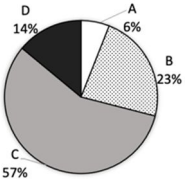
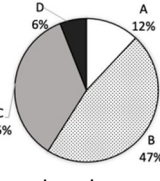
3 共生へのアプローチの創出

価値判断基準が逆転する人々・集団との交流の在り方、共生の在り方について、個人・集団で考える。

以上、教材「チョコレート（中学生用）」と授業構造を示したが、小学生用には場面設定を遠足に変える。また、登場人物は、実施する国によって修正する。授業構造は、学校や児童生徒の実態に応じて修正を可とする。

教材「チョコレート」を活用した授業の実際

研究対象校・学年等：X中において実施。2020年2月と9月に実施した。

対象学年（人数）	第1学年（68名） 2クラスで実施	
実践年月日もしくは期間（時数）	2020年2月（1時間）	
1 活動名：チョコレートから考えよう		
2 キーワード：「異己」の存在の認識、共生、尊重		
3 単元（活動）目標：身近な集団の中にある「異己」の存在を認識し、異なる価値観をもった仲間と対話をするを通して、共生の価値に迫ろうとする。		
4 展開計画（全1時間）		
時	主な学習活動・生徒の反応	留意点および手立て等
事前	<p>○教材「チョコレート」について考え、たけしさん（あきこさん）の行動について、フォームに回答する。</p> <p>A ぜんぜん気にしない、仲良しなのでお互いのものを区別する必要はない、 B 少し違和感はあるが、問題にしない、二人の関係にも影響はない、 C あまりいい気持ちではない、今度またこのようなことがあったら困る、 D 不愉快だ、行動は理解できない、</p> <p>「異なる考えをもつ人たちと生活していく上で必要なこと」について自分の考えをフォームに入力する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスによって回答条件が異なることがないように、短学活で一斉にフォームに回答する場を設定する。その際、教材「チョコレート」の内容を各学級担任が読み上げてから回答するよう指示する。
導入	<p>教材「チョコレート」の内容を確認する。</p> <p>○自分のクラスのアンケート結果を確認する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>図1 自分のクラス</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2 別のクラス</p> </div> </div> <p>○自分たちのクラスのグラフ(アンケート結果)を見て、感じたことや考えたことをフォームに入力する。</p> <p>○別のクラスのグラフを見て、感じたこと考えたことをフォームに入力する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス内で情報を共有することができるよう、「チョコレート」の内容および、各グラフをスクリーンに映し出しながら説明する。 ・意図的に多数派と少数派（「異己」）の存在を強調する。生徒には「異己」の用語は用いずに、少数派と説明する。
展開	<p>○グループの中で、自分の選んだ立場と、その立場を選んだ理由を伝え合う。</p> <p>○A Bを選じた人は「受入側」、C Dを選んだ人は「拒否側」であることを理解し、それぞれの選択理由を確認する。</p> <p>○別のクラスのグラフ(図2)が、北京S中であることを知る。</p> <p>○自分のクラスのグラフ(図1)と北京市S中1年A組のグラフ(図2)を比較し、多数派と少数派が逆転していることに気がつく。</p> <p>○北京S中1年A組がABを多く選んだ理由を予想し、話し合う。</p> <p>出た意見について、グループごとに発表する。</p> <p>北京S中のABを選んだ生徒の理由を聞く。</p> <p>○別のクラスのグラフ(図3)を見て、どのクラスか予想する。</p> <div style="text-align: center;">  <p>図3 X中1年B</p> </div> <p>○図3がX中1年B組であることを知る。</p> <p>○たけしさん（あきこさん）とつよしさん（みかさん）が仲良くするにはどうすべきか、話し合いフォームに記入する。</p> <p>全体で意見を発表し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な意見が交流することができるよう、意図的な座席配置を行い、グループの形になるよう指示する。 ・意見を可視化しながら話し合うことができるよう、ホワイトボードの使用を促す。 ・北京S中の生徒の意見を教師が紹介する。 ・多数派と少数派が逆転していることを強調する。生徒には「異己」の用語は用いずに、少数派と説明する。 ・自クラスを含めた身近なところにも「自分とは異なる考えをもつ他者」がいることを説明する。
終末	<p>「異なる考えをもつ人たちと生活していく上で必要なこと」について自分の考えをフォームに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自己と対話しながら考えをまとめることができるよう、座席を戻して入力するよう指示する。

対象学年（人数）	第2学年（68名） 2クラスで実施	
実践年月日もしくは期間（時数）	2020年9月（1時間）	
1 キーワード：尊重、優しさ、対話		
2 単元（活動）目標：「尊重」と「優しさ」を切り口にして仲間と対話しながら、「共生」の価値に迫ろうとする。		
3 展開計画（全1時間）		
時	主な学習活動・生徒の反応	留意点および手立て等
導入	○前回のチョコレート授業を想起する。 教材「チョコレート」について考え、たけしさん（あきこさん）の行動について、現在の考えをフォームに回答する。 ○グループの中で、自分の選んだ立場と、その立場を選んだ理由を伝え合う。	・第1回目の授業で活用したグラフ（図1～図3他）や、各生徒の価値判断とその理由を確認できるよう、資料を準備する。
展開	○2月の自分の回答を確認する。 ○2月の回答と現在の自分の回答を比較しながら以下のアンケートについてフォームに回答する。 1、 前回と今回で選んだ記号と理由は同じですか。違いますか。同じ理由、違う理由はなんでしょうか。 2、 「チョコレート」の授業後に似たような経験をしたことはありますか。それはどのような経験ですか。また、そのとき、どのようにしましたか。 3、 前回、「異なる考えをもつ人」と共に生活していく上で必要なこととして、「尊重」を挙げる人が多くいました。詳しく教えてください。 「尊重する」とは具体的にはどのようなことだと考えますか。 あなたの普段の生活ではどのようにしていますか。 ○課題について自分の立場を明確にし、黒板にネームプレートを貼る。	・第1回目実践の事前に回答したデータを生徒一人一人に配布する。 ・多様な意見が交流することができるよう、意図的な座席配置を行い、グループの形になるよう指示する。 ・自分の考えを明確にし、仲間の立場が視覚的にもわかるよう、黒板に「優しいと言える」「優しいとは言えない」という項目で座標軸を書き、ネームプレートを貼る活動を位置付ける。 ・それぞれの立場の考えが視覚的にわかるよう、議論において出た意見を黒板に書き出していく。 ・仲間の意見を聞いて、自分の考えが変わる場合はネームプレートを動かすよう指示する。
	前回、Aを選んだ人たちのことを「優しい」とする意見がありました。Aを選んだ人は「優しい」と言えますか、それとも言えませんか。	
	自分がその立場を選んだ理由を、グループの仲間同士で伝え合う。 課題について、全体で議論する。 ○たけしさん（あきこさん）とつよしさん（みかさん）が仲良くするにはどうすべきかについて、フォームに記入する。	
終末	「異なる考えをもつ人たちと生活していく上で必要なこと」について自分の考えをフォームに記入する。	○自己と対話をしながら考えをまとめることができるよう、座席を戻して入力するよう指示する。

【引用・参考文献】

- 釜田聡(2021)「日韓中共同プロジェクトが提起する課題に国際理解教育はどう応えるか」(pp.230-244)日本国際理解教育学会編(2021)『国際理解教育を問い直す 現代的課題への15のアプローチ』明石書店
- 釜田聡・原瑞穂・岩船尚貴(2021)「異己」理解・共生授業プロジェクトにおける生徒の認識」(pp.13-22),日本国際理解教育学会『国際理解教育』vol.27,明石書店
- 釜田聡(2021)『2017-2019年度基盤研究(B)「日・中・韓三カ国協働による「異己」理解共生を旨とした国際理解教育のプログラム開発研究報告書」』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 2件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 釜田・姜・金・津山	4. 巻 24
2. 論文標題 国際委員会報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際理解教育	6. 最初と最後の頁 80-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 釜田・姜・金・堀之内	4. 巻 25
2. 論文標題 国際委員会報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際理解教育	6. 最初と最後の頁 103-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 釜田聡	4. 巻 37
2. 論文標題 「異己」理解共生を旨とした教育実践研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上越教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 343-351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 釜田聡
2. 発表標題 「異己」理解共生授業プロジェクト
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 釜田 聡
2. 発表標題 「異己」理解共生授業プロジェクト
3. 学会等名 韓国国際理解教育学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 釜田 聡・姜英敏・森茂岳雄・市瀬智紀
2. 発表標題 日中共同「異己」理解・共生授業プロジェクトについて
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 姜英敏・釜田 聡
2. 発表標題 日中韓共同「異己」理解・共生授業プロジェクトの現状と課題
3. 学会等名 韓国国際理解教育学会（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	永田 佳之 (NAGATA YOSHIYUKI) (20280513)	聖心女子大学・文学部・教授 (32631)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森茂 岳雄 (MORIMO TAKEO) (30201817)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	市瀬 智紀 (ICHINOSE TOMONORI) (30282148)	宮城教育大学・教員キャリア研究機構・教授 (11302)	
研究分担者	藤原 孝章 (FUZIWARA TAKAAKI) (70313583)	同志社女子大学・現代社会学部・教授 (34311)	
研究分担者	大津 和子 (OTSU KAZUKO) (80241397)	北海道教育大学・教育学部・教授 (10102)	削除：平成29年11月14日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関